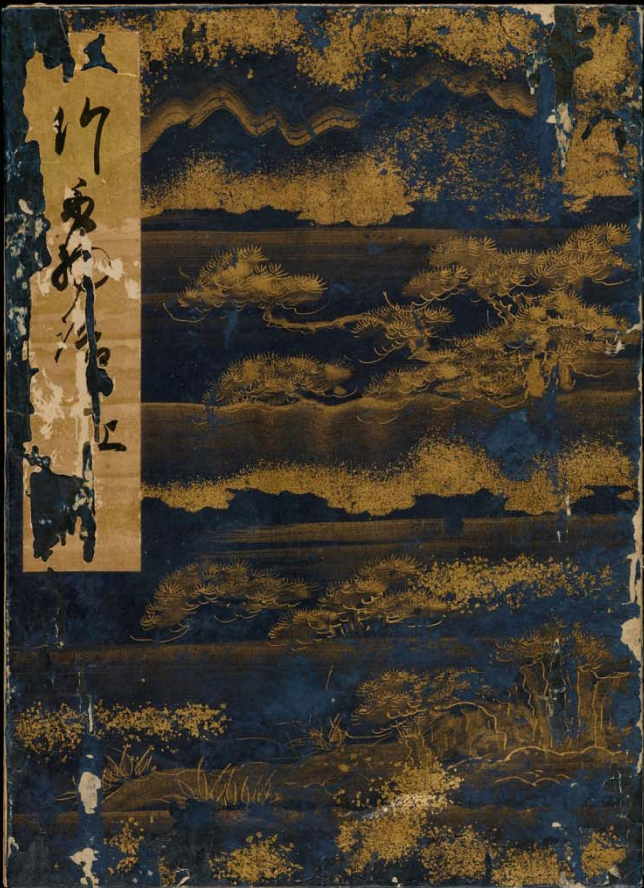


1A0456530 奈良絵本竹取物語 上巻





いまはむかし、たけとりのおきなといふもの  
 のありけり。野山にまじりてたけをとる  
 つゝ、よろづの事につかひにけり。名をばさ  
 るきのみやつことなんいひける。其竹の中  
 にとひかる竹なん一すぢありける。あやし  
 がりて、よりに見るに、つゝの中ひかりたり。  
 それを見れば三すんばかりなる人いと  
 うつくしうていたり。おきないふやう「われ  
 朝ごと夕ごとに見る竹の中におはする  
 にてしりぬ。子になり給ふべき人なめり」



いまはむかし、たけとりのおきなといふもの  
 のありけり。野山にまじりてたけをとる  
 つゝ、よろづの事につかひにけり。名をばさ  
 るきのみやつことなんいひける。其竹の中  
 にとひかる竹なん一すぢありける。あやし  
 がりて、よりに見るに、つゝの中ひかりたり。  
 それを見れば三すんばかりなる人いと  
 うつくしうていたり。おきないふやう「われ  
 朝ごと夕ごとに見る竹の中におはする  
 にてしりぬ。子になり給ふべき人なめり」

こゝろにいらして夢へいりてはなれぬ  
わつしをいへば ちかきうらむさき  
あやしいもさかじきとていへば  
竹とていへば ちかきうらむさき  
てのちよもいへば ちかきうらむさき  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば

とらしてわつしをいへば ちかきうらむさき  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば  
ちかきうらむさきとていへば

とて手にうち入て家へもちて来ぬ。めの女に  
あづけてやしなはず。うつくしき事かぎり  
なし。いとおきなければ、はこに入てやしなふ。  
竹とりのおきな竹とるに、この子を見つけ  
てのちにたけ取に、ふしをへだてよごとこに  
こがねある竹を見つくる事かさなりぬ。か  
くておきなやうくゆたかになりゆく。この  
ちごやしなふほどにすくくとおほきに  
なりまさる。三月ばかりになるほどに、よ  
きほどなる人になりぬれば、かみあげな

どさうして、かみあげさせ、きちやうのうち  
よりも出さず、いつきかしづきやしなふ程に  
此ちごのかたちのけさうなる事世になく、  
屋のうちはくらきところなく、ひかりみち  
たり。おきなこちあしくくるしき時も、  
此子を見ればくるしきこともやみぬ。はら  
だしき事もなく、なぐさみけり。おきな  
竹をとる事ひさしくなりさかへにけり。  
此子いとおほきに成ぬれば、名をみむ  
ろどいんべのあきたをよびてつけさす。



あきた、なよ  
竹のかぐや  
ひめと名をぞ  
つけはべる  
なり。

けりしと口しらあきをわづらひまつれ  
よるもいとくせぬねはひしひき  
とよのつとていしうらやまのて  
此ののこひとわらふもいそいで  
かぐや姫をまほしくかみちり  
よちりしをまほしくかみちり  
家たよひしをまほしくかみちり  
やんねあはれしをまほしくかみちり  
まほしくかみちりしをまほしくかみちり

よぼひとはいひける。人の物ともせぬ所  
にまどひありけども、なにのしるしあるべ  
くも見えず。家の人どもに物をだにい  
むとて、いひかくれども、ことゝもせず。あたり  
をはなれぬ君たち、夜をあかし日をくら  
す人おほかりける。をろかなる人はよう  
なきありきはよしなかりけり。こずなり  
にけり。其中になをいひけるは、いろご  
のみといはるゝ人五人、思ひやむとき  
なく、よるひるきたりけり。その名、一人

此ほど三日、うちあげあそぶが、よろづの  
あそびをぞしける。おとこはたけきは  
ずよびつどへて、いとかしこくあそぶ。世界  
のおのこ、あくなるもいやしきも、いかでこの  
かぐや姫をえてしがな、みてしがなど、をど  
に聞めでゝまどふ。そのあたりのかきにも、  
家のとにもをる人だにたはやすく見る  
まじきものを、よるはやすきいもねず、  
やみの夜にもこゝかしこよりのぞきかひ  
ま見、まどひあへり。さるときよりなん

よぼひとはいひける。人の物ともせぬ所  
にまどひありけども、なにのしるしあるべ  
くも見えず。家の人どもに物をだにい  
むとて、いひかくれども、ことゝもせず。あたり  
をはなれぬ君たち、夜をあかし日をくら  
す人おほかりける。をろかなる人はよう  
なきありきはよしなかりけり。こずなり  
にけり。其中になをいひけるは、いろご  
のみといはるゝ人五人、思ひやむとき  
なく、よるひるきたりけり。その名、一人

ひとりつくりの御子、一人はくらもちの  
 みこ、一人は右大臣あべのみむらじ大納言、  
 一人は左大臣のゆき中納言、一人はいそ  
 のかみのもろたか、此人々なりけり。世中  
 におほかる人をだに、すこしもかたちよし  
 ときよてはみまほしうする人たちな  
 りければ、かぐやひめを見まほしうて、  
 物もくはず思ひつゝ、かの家にゆきて  
 たゞずみありきけれ共、かひ有べくも  
 あらず。文をかきてやれども返事も  
 せしむるに、かぐやひめは、ついでに  
 かひなしと思へども、霜月極月のふり  
 こほり、みな月のてりはたゞくにもさは  
 らずきたり。此人々あるときは竹とり  
 をよびいだし、むすめをわれにたべと  
 ふしおがみ、手をすりのたまへど、おのが  
 なさぬ子なれば、こゝろにもしたがへずと  
 なんいひて月日をよくる。かゝれば此人く  
 家にかへりて物を思ひ、いのりをし、ぐはん  
 をたて、おもひやむべくもあらず。さりとも

はいしつくりの御子、一人はくらもちの  
 みこ、一人は右大臣あべのみむらじ大納言、  
 一人は左大臣のゆき中納言、一人はいそ  
 のかみのもろたか、此人々なりけり。世中  
 におほかる人をだに、すこしもかたちよし  
 ときよてはみまほしうする人たちな  
 りければ、かぐやひめを見まほしうて、  
 物もくはず思ひつゝ、かの家にゆきて  
 たゞずみありきけれ共、かひ有べくも  
 あらず。文をかきてやれども返事も

せず。わびうたなどかきてつかはすれども  
 かひなしと思へども、霜月極月のふり  
 こほり、みな月のてりはたゞくにもさは  
 らずきたり。此人々あるときは竹とり  
 をよびいだし、むすめをわれにたべと  
 ふしおがみ、手をすりのたまへど、おのが  
 なさぬ子なれば、こゝろにもしたがへずと  
 なんいひて月日をよくる。かゝれば此人く  
 家にかへりて物を思ひ、いのりをし、ぐはん  
 をたて、おもひやむべくもあらず。さりとも

は中よ男のいふものらんやとて思ひて  
あのみをかけたなり。あながちに心ざしを  
見えありく。これを見つけて、おきなかく  
やひめにいふやう、御身はほとけへんげの  
人と申ながら、これほどおほきさまで  
やしなひたてまつるころざし、をろかな  
らず。おきな申さん事きゝ給ひてんや。  
といへば、かぐやひめ、何事をかのたまはん  
ことは、承らざらむ。へんげのものにて侍り  
けん身ともしらず、おやとこそおもひ奉れ

といふ。おきな、うれしくもの給ふものかなと  
いふ。おきな年七十にあまりぬ。けふとも  
あすともしらず、この世の人は男は女にあふ  
事をす。女は男にあふことをす。その  
後なん門ひろくもなり侍る。いかでかさ  
る事なくはおはせん。かぐやひめの  
いはく、なんでうさる事かし侍らん  
といへば、へんげの人といふとも女の身もち  
給へり。おきなあらんかぎりは、かうても  
いませかし。この人々の年月をへて、

ついに男あはせざらんやと思ひて  
たのみをかけたなり。あながちに心ざしを  
見えありく。これを見つけて、おきなかく  
やひめにいふやう、御身はほとけへんげの  
人と申ながら、これほどおほきさまで  
やしなひたてまつるころざし、をろかな  
らず。おきな申さん事きゝ給ひてんや。  
といへば、かぐやひめ、何事をかのたまはん  
ことは、承らざらむ。へんげのものにて侍り  
けん身ともしらず、おやとこそおもひ奉れ

といふ。おきな、うれしくもの給ふものかなと  
いふ。おきな年七十にあまりぬ。けふとも  
あすともしらず、この世の人は男は女にあふ  
事をす。女は男にあふことをす。その  
後なん門ひろくもなり侍る。いかでかさ  
る事なくはおはせん。かぐやひめの  
いはく、なんでうさる事かし侍らん  
といへば、へんげの人といふとも女の身もち  
給へり。おきなあらんかぎりは、かうても  
いませかし。この人々の年月をへて、



かゝるいふいふのいふいふをた  
もひさだめて、ひとりくにあひたまへ  
やといへば、かぐやひめいはく、よくもあ  
らぬかたちをふかき心もしらで、あだ  
ごゝろつきなば、のちくやしき事もあ  
るべきをとおもふばかりなり。世のかしこき  
人なりとも、ふかき心ざしをしらではあひがた  
しとなんおもふといふ。おきなのはく、思  
ひのごとくもの給ふかな。そもくいかやうなる  
ごゝろざしあらん人にか、あはんとおぼす。

かばかりごゝろざしおろかならぬ人々に  
こそあめれ。かぐやひめのはく、かばかりの  
ふかきをか、みんといはん、いさゝかの事なり。人  
のごゝろざしひとしかんなり。いかでか中にを  
とりまさりはしらむ。五人の中にゆかしきも  
のを見せ給へらんに、御ごゝろざしまさりたり  
とてつかうまつらんと、そのおはすらん  
人くに申  
たまへ、といふ



かうのみいましつゝのたまふ事をお  
もひさだめて、ひとりくにあひたまへ  
やといへば、かぐやひめいはく、よくもあ  
らぬかたちをふかき心もしらで、あだ  
ごゝろつきなば、のちくやしき事もあ  
るべきをとおもふばかりなり。世のかしこき  
人なりとも、ふかき心ざしをしらではあひがた  
しとなんおもふといふ。おきなのはく、思  
ひのごとくもの給ふかな。そもくいかやうなる  
ごゝろざしあらん人にか、あはんとおぼす。

かばかりごゝろざしおろかならぬ人々に  
こそあめれ。かぐやひめのはく、かばかりの  
ふかきをか、みんといはん、いさゝかの事なり。人  
のごゝろざしひとしかんなり。いかでか中にを  
とりまさりはしらむ。五人の中にゆかしきも  
のを見せ給へらんに、御ごゝろざしまさりたり  
とてつかうまつらんと、そのおはすらん  
人くに申  
たまへ、といふ



よき事なりとうけつ。日くるゝほどに  
 れいのあつまりぬ人々、あるひはふえを  
 ふき、あるひは歌をうたひ、或はしやうが  
 をし、あるひはうそをふき、おふぎをな  
 らしなどするに、おきな出ていはく、かた  
 じけなく、きたなげ成とこるに年月と  
 へてもものし給ふ事、ありがたくかしこま  
 ると申。おきななのいのち、けふあすとも  
 しらぬをかくのたまふ。君だちにもよ  
 くおもひさだめてつかうまつれと申も、こ

よき事なりとうけつ。日くるゝほどに  
 れいのあつまりぬ人々、あるひはふえを  
 ふき、あるひは歌をうたひ、或はしやうが  
 をし、あるひはうそをふき、おふぎをな  
 らしなどするに、おきな出ていはく、かた  
 じけなく、きたなげ成とこるに年月と  
 へてもものし給ふ事、ありがたくかしこま  
 ると申。おきななのいのち、けふあすとも  
 しらぬをかくのたまふ。君だちにもよ  
 くおもひさだめてつかうまつれと申も、こ

とくろりまづらつておしうあつわちう  
まきねば、御ころろぎしのほどは見ゆべし。  
つかうまつらんことはそれになんさだむべき  
といへば、これよき事也。人のうらみもあるま  
じといふ。五人の人くもよき事なりといへば  
おきないりていふ。かぐやひめ、石つくりの御  
子には仏の御石のはちといふ物あり、それを  
とりて給へといふ。くらもちの御子には東の  
海にほうらいといふ山のあるなり。それに  
しろがねをねとし、こがねをくきとし、白

ゆきみしてあつるまうりつとてまづ折  
てあつらんといふ。今ひとりには、もろこしに  
あるひねずみのかはぎぬを給へ。大伴の大納言  
よらあつたてあつるまもせよ。かぐやひめ  
まきねば、御ころろぎしのほどは見ゆべし。  
といへば、これよき事也。人のうらみもあるま  
じといふ。五人の人くもよき事なりといへば  
おきないりていふ。かぐやひめ、石つくりの御  
子には仏の御石のはちといふ物あり、それを  
とりて給へといふ。くらもちの御子には東の  
海にほうらいといふ山のあるなり。それに  
しろがねをねとし、こがねをくきとし、白

玉をみとしてたてる木あり。それ一えだ折  
てたまはらんといふ。今ひとりには、もろこしに  
あるひねずみのかはぎぬを給へ。大伴の大納言  
にはたつのくびに五色にひかる玉あり。  
それをとりてたまへ。いそのかみの中納言  
にはつばくらのめのもたるこやすの貝とりて  
給へといふ。おきな、かたき事にこそあな  
れ。此国にあるものにもあらず。かく  
かたき事をばいかに申さんといふ。  
かぐやひめ、なにかかたらんといへば、

玉をみとしてたてる木あり。それ一えだ折  
てたまはらんといふ。今ひとりには、もろこしに  
あるひねずみのかはぎぬを給へ。大伴の大納言  
にはたつのくびに五色にひかる玉あり。  
それをとりてたまへ。いそのかみの中納言  
にはつばくらのめのもたるこやすの貝とりて  
給へといふ。おきな、かたき事にこそあな  
れ。此国にあるものにもあらず。かく  
かたき事をばいかに申さんといふ。  
かぐやひめ、なにかかたらんといへば、

おきな、ともあれかくもあれ申さんとて  
 出て、かくなん、聞ゆるやうに申給へとい  
 へば、御子たち、上達部きよて、をいらかに  
 あたりよりだになありきそとやは、のたま  
 はぬといひて、うんじてみなかへりぬ。なを此  
 女見では世にあるまじき心ちのしければ、  
 てんぢくにあるものもてこぬものは、と  
 思ひめぐらして、いしつくりの御子はこゝろの  
 したく有人にて、天ぢくに二つとなきはち  
 を、百千万里のほどいきたりとも、いかでか取

へよしおしあふくやまめのものしつゆは  
 きふらんとらんくへ石のちとりに  
 けふなるともあてに年つと大和の国  
 とをちのこほりにある山寺にびんずる  
 のまへなるはちのひたぐるにすみきた  
 るをとりに、にしきのふくろに入て、つくり  
 花のえだにつけて、かぐやひめの家にも  
 てきて見せければ、かぐやひめあやしがりて  
 見ればはちの中に文あり。ひろげてみ  
 れば

おきな、ともあれかくもあれ申さんとて  
 出て、かくなん、聞ゆるやうに申給へとい  
 へば、御子たち、上達部きよて、をいらかに  
 あたりよりだになありきそとやは、のたま  
 はぬといひて、うんじてみなかへりぬ。なを此  
 女見では世にあるまじき心ちのしければ、  
 てんぢくにあるものもてこぬものは、と  
 思ひめぐらして、いしつくりの御子はこゝろの  
 したく有人にて、天ぢくに二つとなきはち  
 を、百千万里のほどいきたりとも、いかでか取

へよしおしあふくやまめのものしつゆは  
 きふらんとらんくへ石のちとりに  
 けふなるともあてに年つと大和の国  
 とをちのこほりにある山寺にびんずる  
 のまへなるはちのひたぐるにすみきた  
 るをとりに、にしきのふくろに入て、つくり  
 花のえだにつけて、かぐやひめの家にも  
 てきて見せければ、かぐやひめあやしがりて  
 見ればはちの中に文あり。ひろげてみ  
 れば

海やまのみちに入らば心つくしはて  
 ないしのはちの泪ながれき  
 かぐやひめひかりやあるとみるからに  
 ほたるばかりのひかりだになし。  
 をく露のひかりをだにもやどさまし  
 小ぐら山にてなにもとめけん  
 とて返し出す。はちを門にすてゝこの  
 歌の返しをす  
 しら山にあへばひかりのうするかと  
 はちをすてゝもたのまるゝ哉

とよみて入たり。かぐやひめかへしもせず  
 なりぬ。みゝにもきゝ入ざりければ、いひかゝ  
 づらひて帰りぬ。かのはちをすてゝ又いひ  
 けるよりぞ



おもなき事をば  
 はちをすつ  
 るとはいひ  
 ける。



くらもちの御子は心たばかりある人にて  
 おほやけにはつくしの国にゆあみに  
 まからんとていとま申てかぐやひめの家に  
 は、玉のえだとりになんまかるといさせて  
 くだり給ふに、つかうまつるべき人く、みな  
 難波まで御をくりしける。御子、いとしのび  
 て、との給はせて、人もあまたゐておはし  
 まさず、ちかうつかうまつるかぎりして  
 出給ひ御をくりの人く、見たてまつりをくり  
 てかへりぬ。おはしましぬと人には見え給ひて

くらもちの御子は心たばかりある人にて  
 おほやけにはつくしの国にゆあみに  
 まからんとていとま申てかぐやひめの家に  
 は、玉のえだとりになんまかるといさせて  
 くだり給ふに、つかうまつるべき人く、みな  
 難波まで御をくりしける。御子、いとしのび  
 て、との給はせて、人もあまたゐておはし  
 まさず、ちかうつかうまつるかぎりして  
 出給ひ御をくりの人く、見たてまつりをくり  
 てかへりぬ。おはしましぬと人には見え給ひて

三日ばかりありてこぎかへり給ぬ。かねて  
ことみな仰せたりければ、其時一つのた  
からなりけるかぢたくみ六人をめし取て  
たはやすく人よりくまじき家をつく  
りて、かまどを三へにし籠てたくみらを入  
たまひつゝ、御子もおなじところにもり  
たまひてしらせ給ひたる限十六所  
をかみにくどをあけて、玉のえだをつ  
くり給。かぐやひめのたまふやうにた  
がはずつくり出つ。いとかしこくたば

かりてなにはみそかにもていでぬ。舟  
のりてかへりきにけりと殿につげやり  
て、いといたくくるしがりたるさましてゐ  
給へり。むかへに人多く参りたり。玉のえだ  
をば長ひつに入て物おもひてもちて  
まいる。いつか聞けんくらもちの御子は  
うどんげ葱の花を持てのぼりたまへ  
りとのゝしりけり。これをかぐや姫聞て  
我はこの子にまけぬべしとむ  
ねつぶれておもひけり。

ねつぶれておもひけり。

三日ばかりありてこぎかへり給ぬ。かねて  
ことみな仰せたりければ、其時一つのた  
からなりけるかぢたくみ六人をめし取て  
たはやすく人よりくまじき家をつく  
りて、かまどを三へにし籠てたくみらを入  
たまひつゝ、御子もおなじところにもり  
たまひてしらせ給ひたる限十六所  
をかみにくどをあけて、玉のえだをつ  
くり給。かぐやひめのたまふやうにた  
がはずつくり出つ。いとかしこくたば  
かりてなにはみそかにもていでぬ。舟  
のりてかへりきにけりと殿につげやり  
て、いといたくくるしがりたるさましてゐ  
給へり。むかへに人多く参りたり。玉のえだ  
をば長ひつに入て物おもひてもちて  
まいる。いつか聞けんくらもちの御子は  
うどんげ葱の花を持てのぼりたまへ  
りとのゝしりけり。これをかぐや姫聞て  
我はこの子にまけぬべしとむ  
ねつぶれておもひけり。



かゝるほどに門をたゞきてくらもちの  
 御子おはしたりとつぐる。旅の御すがたながら  
 おはしたりろいへばあひたまつる。御子  
 の給はく命をすてゝかの玉のえだもち  
 てきたるとてかぐやひめに見せたてまつ  
 り給といへばおきなもちていたり。こ  
 の玉のえだに文ぞついたりける。いた  
 づらに身はなしつとも玉のえを  
 たをらでさらにかへらざらまし  
 これをも哀とも見でをるに竹とりの

かゝるほどに門をたゞきてくらもちの  
 御子おはしたりとつぐる。旅の御すがたながら  
 おはしたりろいへばあひたまつる。御子  
 の給はく命をすてゝかの玉のえだもち  
 てきたるとてかぐやひめに見せたてまつ  
 り給といへばおきなもちていたり。こ  
 の玉のえだに文ぞついたりける。いた  
 づらに身はなしつとも玉のえを  
 たをらでさらにかへらざらまし  
 これをも哀とも見でをるに竹とりの



おきなはしり入ていはいくこの御子に申給ひ  
しほうらいの玉のえだを一つのところを  
あやまたずもおはしませり。何をもち  
てとかく申べき。たびの御すがたながらわが  
御家へもより給はずしておはしましたり。  
はや此御子にあひつかうまつり給へと  
いふに物もいはずらづえをつきていみ  
じくなげかしげに思ひたり。この御子今さへ  
何かといふべからずといふまゝにえんに  
はひのぼり給ぬ。おきな理りに思ふ

此国に見えぬ玉のえだなり。此度はいか  
でか、いなび申さん。人様もよき人におはす  
などいひあたり。かぐやひめのいふやう  
おやのゝたまふ事をひたぶるにいなび  
申さんことのおしさに取がたき  
物をかくあさましくも来る事を  
ねたく思ひおきなはねやのうちしつ  
らひなどす。おきなみこに申様いかな  
る所にか此木は候ひけん。あやしくうる  
わしくめでたきものにもと申。御子こ

此国に見えぬ玉のえだなり。此度はいか  
でか、いなび申さん。人様もよき人におはす  
などいひあたり。かぐやひめのいふやう  
おやのゝたまふ事をひたぶるにいなび  
申さんことのおしさに取がたき  
物をかくあさましくも来る事を  
ねたく思ひおきなはねやのうちしつ  
らひなどす。おきなみこに申様いかな  
る所にか此木は候ひけん。あやしくうる  
わしくめでたきものにもと申。御子こ

わしくめでたきものにもと申。御子こ

あつてのくあつてさゆ〜二月の  
十日ころに難波より舟にのりて海中に  
いでゆかん方もしらずおぼえしかどお  
もふ事ならで、世中にいきて何かせんと  
思ひしかば、ただむなしき風にまかせて  
ありく命しなばいかゞはせん、生てあら  
んかぎりかくありきてほうらいといふらん  
山にあふやと海にこぎたゞよひあり  
きて、我国の内をはなれてありきまかり  
しにある時浪のあれつゝうみのそこにも

入ぬべく有時には風につけてしらぬ  
国に吹よせられて鬼のやうなるもの  
出来てころさんとしき。有時はこしかた  
行すえもしらでうみにまぎれんとし、  
有時にはかてつきて草のねをくひもの  
とし、有ときはいはんかたなくむくつけ  
なるものゝきてくひかゝらんとしき。有  
時はうみのかいをとりて命をつぐ。  
旅のそらにたすけ給ふべき人もな  
き所に色々の病をして行方空も

たへてのたまはく、さおとゝしの二月の  
十日ころに難波より舟にのりて海中に  
いでゆかん方もしらずおぼえしかどお  
もふ事ならで、世中にいきて何かせんと  
思ひしかば、ただむなしき風にまかせて  
ありく命しなばいかゞはせん、生てあら  
んかぎりかくありきてほうらいといふらん  
山にあふやと海にこぎたゞよひあり  
きて、我国の内をはなれてありきまかり  
しにある時浪のあれつゝうみのそこにも

入ぬべく有時には風につけてしらぬ  
国に吹よせられて鬼のやうなるもの  
出来てころさんとしき。有時はこしかた  
行すえもしらでうみにまぎれんとし、  
有時にはかてつきて草のねをくひもの  
とし、有ときはいはんかたなくむくつけ  
なるものゝきてくひかゝらんとしき。有  
時はうみのかいをとりて命をつぐ。  
旅のそらにたすけ給ふべき人もな  
き所に色々の病をして行方空も

おぼえず舟のゆくにまかせてうみにたゞよ  
ひて五百日と云たつのこくばかりにうみの  
中にはつかに山みゆ。舟の内をなんせめて  
見る。うみのうへにたゞよへる山いとおほきに  
てあり。其山のさまたかくうるはし。是やわが  
もとむる山ならんと思ひて、さすがにおそろ  
しく覚えて山のめぐりをさしめぐらして二  
三日ばかり見ありくに天人のよそほひし  
たる女山の中より出来てしろがねのこな  
まるをもちて水をくみありく。是を見て

あはれおぼえては山の名を何とか申ととふ。  
女こたへていふ、これはほうらいの山なりと  
こたふ。是を聞にうれしき事がぎりなし。  
此女かくのたまふは誰ぞととふ。我名は、ほう  
かんるといふて、ふと山の中に入ぬ。その山  
を見るにさらに上るべき様なし。その  
山のそばひらをめぐれば、世中になき  
花の木もたたり、うひろる金るり色の  
水、山よりながれ出たり。それには色く玉の  
橋わたせり。其あたりに、てりかがやく木ども

おぼえず舟のゆくにまかせてうみにたゞよ  
ひて五百日と云たつのこくばかりにうみの  
中にはつかに山みゆ。舟の内をなんせめて  
見る。うみのうへにたゞよへる山いとおほきに  
てあり。其山のさまたかくうるはし。是やわが  
もとむる山ならんと思ひて、さすがにおそろ  
しく覚えて山のめぐりをさしめぐらして二  
三日ばかり見ありくに天人のよそほひし  
たる女山の中より出来てしろがねのこな  
まるをもちて水をくみありく。是を見て

舟よりおりて此山の名を何とか申ととふ。  
女こたへていふ、これはほうらいの山なりと  
こたふ。是を聞にうれしき事がぎりなし。  
此女かくのたまふは誰ぞととふ。我名は、ほう  
かんるといふて、ふと山の中に入ぬ。その山  
を見るにさらに上るべき様なし。その  
山のそばひらをめぐれば、世中になき  
花の木もたたり。こがねしる金るり色の  
水、山よりながれ出たり。それには色く玉の  
橋わたせり。其あたりに、てりかがやく木ども

まわもゆりけりてしりてまうて  
まひしにたがはましかばとこのはなを  
おりてまうでくる也。山はかぎりな  
くおもしろし世にたとふべきにあらざ  
りしかど此えだをおりてしかば、さら  
にこゝろもとなくて舟のりておひかぜ  
ふきて四百余日になんまうできにし。

大願の力にや

難波より

まきのふ南都に

まうできつる

さらにしほに

ぬれたるころ

もだにぬきかへ

なくてなん

たちまうできつる

とのたまへば

立り、其中に此とりてもちてまうで

きたりしはいとわろかりしか共のた

まひしにたがはましかばとこのはなを

おりてまうでくる也。山はかぎりな

くおもしろし世にたとふべきにあらざ

りしかど此えだをおりてしかば、さら

にこゝろもとなくて舟のりておひかぜ

ふきて四百余日になんまうできにし。

大願の力にや

難波より

まきのふ南都に

まうできつる

さらにしほに

ぬれたるころ

もだにぬきかへ

なくてなん

たちまうできつる

とのたまへば



わりなすてうらなげきてよめる  
 くれ竹の世々の竹とり野山にも  
 さやはわびしきふしをのみ見し  
 これを御子聞てこゝらの日ごろおもひ  
 わび侍つるこゝろはけふなんおちい  
 ぬるとのたまひてかへし  
 わがたもとけふかはければわびしさの  
 千草のかずも忘れぬべし  
 との給ひかゝる程に男ども六人つらねて  
 庭に出来。一人のおとこふばさみに文を

おきな聞てうちなげきてよめる  
 くれ竹の世々の竹とり野山にも  
 さやはわびしきふしをのみ見し  
 これを御子聞てこゝらの日ごろおもひ  
 わび侍つるこゝろはけふなんおちい  
 ぬるとのたまひてかへし  
 わがたもとけふかはければわびしさの  
 千草のかずも忘れぬべし  
 との給ひかゝる程に男ども六人つらねて  
 庭に出来。一人のおとこふばさみに文を

とらふてくもむづかさのたくみ、あや  
べのうちまる申、さく玉の木をつくり、  
つかふまつりし事古国をたちて千余日  
に力をつくしたる事すくならず。しか  
るにろくいまだ給はず是を給てわるき  
けこに給せんと云てさゝげたる。竹とりの  
おきな此たくみらが申事は何事ぞとか  
たぶきおり。御子はわれにもあらぬけし  
きにて、きもきえぬ給へり。是をかぐやひめ  
きゝてこのたてまつる文をとれと云て見

とて入らむけりや。御子は千日や  
まあつてし事古国をたちて千余日  
に力をつくしたる事すくならず。しか  
るにろくいまだ給はず是を給てわるき  
けこに給せんと云てさゝげたる。竹とりの  
おきな此たくみらが申事は何事ぞとか  
たぶきおり。御子はわれにもあらぬけし  
きにて、きもきえぬ給へり。是をかぐやひめ  
きゝてこのたてまつる文をとれと云て見

はさみて申、くもむづかさのたくみ、あや  
べのうちまる申、さく玉の木をつくり、  
つかふまつりし事古国をたちて千余日  
に力をつくしたる事すくならず。しか  
るにろくいまだ給はず是を給てわるき  
けこに給せんと云てさゝげたる。竹とりの  
おきな此たくみらが申事は何事ぞとか  
たぶきおり。御子はわれにもあらぬけし  
きにて、きもきえぬ給へり。是をかぐやひめ  
きゝてこのたてまつる文をとれと云て見

れば文に申けるやう御子の君千日いやし  
きたくみらともろとも同ところにかく  
れぬたまひてかしこき玉のえだをつ  
くらせ給ひてつかさもたまはらんと仰た  
まひき、これをこのごろあんずるに、御つか  
ひとおはしますべきかぐやひめのえうじ  
給ふべきなりけりとうけ給はりて此みや  
より給はらむと申て給べきなりといふを  
きゝてかぐやひめくるゝまゝに思ひわび  
つる心ちわらひさかへておきなをよ

いふやうにして、ほうらいの木  
かとおもひつれ。かくあさましきそ  
らごとにてありければ、はやかへし給へと  
いへば、おきなこたふ。さだかにつくらせた  
るものと聞つれば、かへさん事いとやすし  
とうなづきを。かぐやひめの心ゆきは  
てゝありつるうたのかへし  
まことかと聞てみつればことのはを  
かざれる玉のえだにぞありける  
といひて玉のえだもかへしつ。おきな

えうわつて、つらまゝにやりてね  
うをわひよびのしり、まゝなり  
こそかほわひしき、おきなをさしてわいて  
は、ぬれぬしき、あかしくとて  
や、あかしくとて、うらゝきとて、ま  
お、いひて、ろくいと、おほく、とて、  
ま、あたくし、おほく、とて、おほく、とて、  
は、おほく、とて、おほく、とて、おほく、とて  
お、おほく、とて、おほく、とて、おほく、とて  
お、おほく、とて、おほく、とて、おほく、とて

びとりていふやうまことに、ほうらいの木  
かとおもひつれ。かくあさましきそ  
らごとにてありければ、はやかへし給へと  
いへば、おきなこたふ。さだかにつくらせた  
るものと聞つれば、かへさん事いとやすし  
とうなづきを。かぐやひめの心ゆきは  
てゝありつるうたのかへし  
まことかと聞てみつればことのはを  
かざれる玉のえだにぞありける  
といひて玉のえだもかへしつ。おきな  
さばかりかたらひつるがさすがにおぼえてね  
ぶりを。御子はたつもはしたるもはした  
にてお給へり。日も暮ぬればすべりいで  
給ひぬ。かのうれへせしたくみをばかぐ  
やひめよびすへて、うれしき子どもな  
りといひてろくいとのおほくとらせた  
まふ。たくみら、いみじくよろこびて思ひ  
つる様にもあるかなといひて帰る。みち  
にてくらのちの御子、ちのながるゝまで調  
させ給ふ。ろくえしかひもなく皆とりす

てさせ給ひてければ、にげうせにけり。  
かくてこの御子一生のはぢこれに過るは  
あらじ。女をえずなりぬのみにあら  
ず天下の人のおもはん事のはづかし  
き事とのたまひてたゞ一所ふかき山  
へいり給ひぬ。宮づかささぶらふ人  
皆手をわかちてもとめたてまつれ共  
御死にもやし給ひけんえ見つけたてま  
つらざるぬ。御子の御供にかくしたま  
はんとてとし頃見えたまはざりける也。

是をなん玉さかるとは云はじめける。  
右大臣あべのみむらじは、たからゆた  
かに家ひろき人にぞおはしける。その  
年きたりけるもろこし船のわうけい  
と云人のもとに文をかきて火ねずみ  
のかはといふなるものかひておこせよと  
てつかうまつる人の中に心たしかなる  
をえらびて小野のふさもりといふ人を  
つけてつかはすとて、もていたりかの  
うらにをるわうけいにこがねをと

てさせ給ひてければ、にげうせにけり。  
かくてこの御子一生のはぢこれに過るは  
あらじ。女をえずなりぬのみにあら  
ず天下の人のおもはん事のはづかし  
き事とのたまひてたゞ一所ふかき山  
へいり給ひぬ。宮づかささぶらふ人  
皆手をわかちてもとめたてまつれ共  
御死にもやし給ひけんえ見つけたてま  
つらざるぬ。御子の御供にかくしたま  
はんとてとし頃見えたまはざりける也。

是をなん玉さかるとは云はじめける。  
右大臣あべのみむらじは、たからゆた  
かに家ひろき人にぞおはしける。その  
年きたりけるもろこし船のわうけい  
と云人のもとに文をかきて火ねずみ  
のかはといふなるものかひておこせよと  
てつかうまつる人の中に心たしかなる  
をえらびて小野のふさもりといふ人を  
つけてつかはすとて、もていたりかの  
うらにをるわうけいにこがねをと



りしまきけいふみとゆるりてみる  
 なましく火ねずみのかはごろもこの国  
 になきものなり。音にはきけども  
 いまだみぬものなり。世にあるもの  
 ならば此くにとももてまうで、き  
 なまし。いとかたきあきなひなり。  
 しかれども、もし天ぢくにだまさかに  
 もてわたりなば、若、長者のあたり  
 にとぶらひもとめんに、なきもの  
 ならば、つかひにそへてこがねをかへし



たてまつらんと  
 いへり。かの  
 もろこし船  
 かなとまち  
 けり

らす。わうけいふみをひろげて見て  
 返事かく。火ねずみのかはごろもこの国  
 になきものなり。音にはきけども  
 いまだみぬものなり。世にあるもの  
 ならば此くにとももてまうで、き  
 なまし。いとかたきあきなひなり。  
 しかれども、もし天ぢくにだまさかに  
 もてわたりなば、若、長者のあたり  
 にとぶらひもとめんに、なきもの  
 ならば、つかひにそへてこがねをかへし

たてまつらんと  
 いへり。かの  
 もろこし船  
 かなとまち  
 けり







紅印

上海圖書館藏

圖書集成

1A0454530

